

人権コラム「きずな」 5月号

無気力なネズミはもう終わり

神村 早織 (大阪教育大学)

なかなか衝撃的なタイトルの映画が公開されている。「酔うと化け物になる父がつらい」という映画だ。主人公のサキを演じるのは、CMなどでも活躍する女優の松本穂香。原作は、その名の通り、アルコール依存症の父のいる家庭で育った漫画作家が自分の実体験に基づいて描いたもので、同じような体験をする若者たちの共感を得て人気となった。ネット配信サイトで連載されていたのだが、新作公開の時にはアクセスが集中してサーバーがダウンするほどだったという。このコラムが配布される頃には映画の公開は終了しているだろうが、原作の漫画が単行本として発刊されたので関心のある方は一度読んで見てはと思う。重たい現実を扱っているが、「当事者」ならではの経験に基づく「あるある」ネタも、また、単純な善悪でははかれない温かみのある人の描き方も、若い人たちが共感するところなのだろうと思う。

さて、主人公のサキは、父、母、妹との4人家族。父親は小さな会社を経営しており、母親は専業主婦。どこにでもある普通の家庭のように見える。が、父親はアルコールに溺れており、その現実から逃避するため母親は新興宗教にはまっている。毎朝家を出て仕事に行く時には普通の父親なのだが、ひとたびお酒が入ると酔い潰れて別人になって帰ってくるのだ。幼い頃から酔った父親を介抱することが日常になっていた主人公は、自分の感情に蓋をして生きるようになる。

サキが友人の勧めで通信制の大学に入学し、心理学の講義で「学習性無気力」の動物実験について学んだ時のことだ。その実験では、檻にネズミを閉じ込め、ランダムに電流を流す。すると最初はそこから逃げようとするが、長期間続くと「何をやっても無理」ということを学習し、電流が流れてもただ我慢するようになる。これを学習性無気力というが、人間にも同じようなことが起きるということを知り、サキは自分に重ねる。

大学のジェンダーの授業でDVの被害者支援を扱う時も、この「学習性無気力」の動物実験について話すと多くの学生たちが、自分の家庭でも同じようなことがあったと書いてくる。また恋人からDV支配を受けていた学生たちも自分を重ねて振り返ることがよくある。DVやいじめなど、権力を持つ者によって気の向いた時に恣意的に（規則性なく、気まぐれに）支配される時、人間は自由と尊厳を失う。だからこそ、学生たちには支援者にはこんなメッセージが大切だと伝える。オリの外には新しい世界があるのだと。誰かに捨てられても、私は私でこれからも生きていけるのだと。

主人公サキも同じだ。自分の人生とネズミが重なることに気づき、泥酔する父親から、DV支配をする恋人から自由になる選択をする。その時の漫画の吹き出しのセリフが、このコラムの表題「無気力なネズミはもう終わり」なのである。